九州天皇家論
2章　天孫降臨

出雲王朝征服譚

天孫降臨ルート

時に、高皇産霊尊（たかみむすひのみこと）、眞床迫衾（まとこおふふすま）を以て、皇孫天津彦火瓊瓊杵尊に覆（おほ）ひて、降（あまくだ）りまさしむ。皇孫、乃ち天磐座（あまのいはくら）を離（おしはな）ち、且（また）天八重雲を排分（おしわ）けて、稜威（いつ）の道別（ちわけ）に道別きて、日向（ひむか）の襲（そ）の高千穂峯に天降（あまくだ）ります。既にして皇孫の遊行（いでま）す状（かたち）は、槵日（くしひ）の二上（ふたがみ）の天浮橋より、浮渚在平處（うきじまりたひら）に立たして、膂宍（そしし）の空國（むなくに）を、頓丘（ひたを）から國覓（くにま）ぎ行去（とほ）りて、吾田（あた）の長屋（ながや）の笠狭崎（かささのみさき）に到ります。

私たちは「天孫降臨」のルートをほぼ正確に辿ることができる。神話時代に皇孫瓊瓊杵尊が「葦原中國」に進出していった際に通った山の道を一緒に歩いて見ましょう。

彦島を出発した瓊瓊杵尊一行は対岸の企救半島に渡った。関門海峡をどこで渡ったのであろうか。関門海峡の難しい浪をできるだけ避けて古来浪速の渡しとして有名だったのは門司港と壇ノ浦を結ぶ渡しである。ここが最短距離である。皇孫瓊瓊杵尊はここを渡ったと思われる。門司港に着いた一行は25号線を進み、やがて山道に入って行った。戸ノ上山(517m)まで登り、そこから尾根を縦走して西南に向かった。そして、到着した山が企救半島の最高峰足立山(597m)である。別名は霧が岳。古来、霧がかかることで有名である。

> 天津彦々火瓊瓊杵尊、天の磐座(いわくら)を離れ、天の八重雲を排(おしわけ)けて、稜威(いつ)の道別き道別きて、日向の高千穂の二上(ふたかみ)の峯に天降りましき。時に、天暗冥(くら)く、夜昼別けず、人物道を失い、物の色別き難たかりき。

日向國風土記が、「二上の峯で、天暗冥(くら)く」と、このように描写した原因は濃霧である。

企救自然歩道が瓊瓊杵尊ルート

瓊瓊杵尊が通った山の道は古来からの企救半島の道であった。当時この山には「襲國」という古代國が存在し、その國の人々は山の道を通って生活していた。瓊瓊杵尊以前にすでに生活道路が存在していた。瓊瓊杵尊が尾根を切り開き、道を作り進んだのではない。すでに名があった道を進んだのである。その山道は現代に引き継がれている。企救自然歩道である。

この道からの眺望はすばらしい。幾多の「HP」にその写真が掲載されている。その中の一つをお借りし、しばし眺望を楽しんでみましょう。この風景を見ながら瓊瓊杵尊も「葦原中國」を目指しました。

戸ノ上山からの眼下の展望

瓊瓊杵尊一行は眼下に故郷彦島を見ていた。天（あま）國、天照大神の統治する大八洲の都「高天原」が遠望できる。母國を右手に見ながら瓊瓊杵尊一行は山の中に入っていきました。

（www.geocities.jp/houshizaki/tonoueyama-adatiyama-kitakyusyusi.htm）

大台ヶ原の展望

ここが、本来の大台ヶ原である。険しい尾根伝いの道であるがここは大きな台のような所に道が通じている。向こうに見える山が足立山（高千穂峯）である。

且（また）天八重雲を排分（おしわ）けて、稜威（いつ）の道別（ちわけ）に道別きて、日向（ひむか）の襲（そ）の高千穂峯に天降（あまくだ）ります。

（www.geocities.jp/houshizaki/tonoueyama-adatiyama-kitakyusyusi.htm）

足立山から眼下の眺望

瓊瓊杵尊一行は足立山に到達した時、濃霧で周囲が見えなくなった。そこで稲穂を播く神事を行った結果霧は晴れた。その時眼下に見えたのが「豊葦原中国（小倉北区）」である。一行は妙見山、小文字山を経て小

倉北区に降りていきました。

（www.geocities.jp/houshizaki/tonoueyama-adatiyama-kitakyusyusi.htm）

企救自然歩道

現在の多くの愛好者が通う道が企救自然歩道である。瓊瓊杵尊一行もこの道を歩んでいきました。

（www014.upp.so-net.ne.jp/muukasan/05-1210adachi.html）